

ふるさとの「ひと」「もの」「こと」に積極的に関わろうとする子供の育成を目指して
～SDGs との関連を図りながら～

1 はじめに

本校は、射水市南部の丘陵地帯に位置し、校区には県民公園太閤山ランドや薬勝寺池公園等の自然豊かな環境が広がり、近くには富山県立大学や環境科学センター等の各種研究機関も多い。地域には研究や教育に熱心な風土があり、昨年度、学校応援ボランティアを募集したところ、約30名もの登録があった。今年度は、「これまでの活動をSDGsの観点から捉え直し、地域人材のより一層の活用を図る」を重点目標に掲げ、ふるさとの「ひと」「もの」「こと」に積極的に関わろうとする子供の育成を目指した。

2 活動の実践

(1) 第2学年 生活科「わたしたちの町大すき」

継続・発展

例年2年生は、自分の住む町のすてきな「ひと」「もの」「こと」を見付ける「町探検」を行っている。今年度は、繰り返し交流することでより関心をもって進んで関わる子供の姿を目指した。

1学期には、地域のすてきな施設やお店、公園等を訪ね、そこに働く人や売っている商品、サービス等に目を向けてきた。福祉施設「太閤の杜」も訪ね、屋外からベランダ越しに歌と踊りをプレゼントしてきた。コロナ禍によって交流が途絶えていただけに、施設のお年寄りに大変喜ばれた。

2学期には、1学期に訪ねた場所の中から、さらに「あの人に会いたいな」と思う人の子供たちが選び、学校応援ボランティアと一緒にインタビューに出かけた。お店の名前の由来や仕事の内容、何よりもそこで働いている人の思い等に詳しくなるにつれ、自分たちの住む地域への親しみや愛着が増していった。



＜「太閤の杜」で歌と踊りを
プレゼントする子供＞



＜お店を訪ねてインタビューする子供＞

(2) 第3学年 総合「見つけよう！広めよう！中太のすてき」

継続・方向転換

本校の敷地内には県内では珍しいジャコウアゲハが生息する。毎年、3年生がジャコウアゲハを飼育・観察する活動を行ってきたが、今年度はSDGsの観点から「守り育てる活動」へと方向転換を図った。

まず、地域のゲストティーチャーから、「体に



＜オスのジャコウアゲハと
幼虫の餌のウマノスズクサ＞

毒を持っているため天敵に襲われにくいこと」

「そのため優雅な飛び方ができること」「年に4～5回羽化すること」等のジャコウアゲハの特徴や飼育方法等を教えてもらった。子供たちにとっては見慣れていたジャコウアゲハであったが、ゲストティーチャーの話から貴重な蝶であること、それが自然に敷地内に生息する不思議さに気付き、意欲満々で飼育活動に取り組んでいた。花壇に自生するウマノスズクサから卵を採取し、教室で幼虫から蛹、成虫まで育て、いのちの神秘を体感した。

また、実際に飼育活動を行ったことで、幼虫の餌となるウマノスズクサの大切さに目が向いた。ウマノスズクサが無いと幼虫は生きていけないこと、卵を産み付ける場所が無くなり子孫を残すことができなくなることを知った子供たちは、ウマノスズクサの環境を守る活動にも積極的に関わった。防除作業の際には、ブルーシートをかけて薬剤からウマノスズクサを守ったり、ジャコウアゲハの貴重さを学習発表会のステージ発表で全校児童に広めたり、薬勝寺池のすてきを見つけた活動と併せてカルタを作成し各クラスへ配ったりした。

子供たちは活動を通して、ジャコウアゲハを守り育てるためには、ジャコウアゲハだけでなく、その周辺の環境そのものを守ることが大切であることに気付いていった。



＜ゲストティーチャーからジャコウアゲハの特徴等を教えてもらう子供＞



＜成虫まで飼育したジャコウアゲハが飛び立つ瞬間を見守る子供＞



＜薬剤からウマノスズクサを守る子供＞

(3) 第4学年 総合「トンボの棲める環境づくり」

清掃前のプールには、秋から春にかけて棲みついた水生動物が生息しているが、排水してしまえば、そのいのちは奪われてしまう。4年生は、清掃前のプールにヤゴ等の水辺の生き物がどれだけ生息しているか調べた。赤トンボやシオカラトンボ等のヤゴの他、オタマジャクシ等も見付かり、子供たちは歓声をあげていた。地域のビオトープアドバイザーの指導の下、ヤゴを育て、成長過程を見守る活動を行った。順調に育っていたヤゴであったが、カラス等の天敵から守ることができず、トンボが棲み続けられる環境を守る難しさを思い知る活動となった。

新規



＜ビオトープアドバイザーからプールに棲むヤゴについて学ぶ子供＞

(4) 第4学年 社会科「郷土の発展につくす～石黒信由～」 **新規**

射水市ゆかりの石黒信由を教材化した。信由が作成した「加越能三州郡分略絵図」と現在の同県を描いた地図、信由の絵図以前に描かれた絵図を比較することで、子供たちは「ドローン等もない200年も前にどうやってこのように正確に地図を描いたのだろう」と疑問をもった。その疑問を基に学習問題を作り上げた。

読み物資料で下調べをした上で、石黒信由の多くの資料が収蔵されている射水市新湊博物館を訪れた。そして、信由が使った測量器具を実際に見たり、信由が残した書物に記されている方法で測量体験を行ったりした。特に測量体験では、正確に測ることの難しさを知り、それを成し遂げた信由の偉大さを実感していた。

実際に体験したり、実物を見たりできる地域教材を開発したことで、子供たちは自ら見付けた課題を解決していく、問題解決学習の楽しさを味わうことができた。



＜石黒信由作成の絵図＞



＜新湊博物館で測量体験に挑戦する子供＞

(5) 第5学年 総合「火災ゼロのまちづくりを目指して」 **新規**

5年生は、まず、昨年度に引き続き SDGs 教室を開き、カードゲーム等を通して SDGs への理解を深めた。その上で、SDGs の目標 11「住み続けられるまちづくりを」を念頭に置きながら、火災予防について調べ始めた。消防署員や地域の消防団長から話を聞いたり、消火器の使い方を体験したりしたことを基に、自分にできることを考え、学習発表会でのステージ発表等で全校児童に紹介した。また、地域に防火を呼びかけるチラシやポスターを作成し、施設等にて掲示を依頼するなど、地域のために貢献する活動も行った。

3学期には、消防署員や地域から消防団・女性消防団を招いて、保護者とともに心肺蘇生法について学ぶ予定である。自分たちが少しでも災害のときに役立つ人材として活躍できることを願い、子供たちが企画・運営を進めている。



＜学習発表会で火災予防を
呼びかける子供＞



＜地域へ火災予防のポスターを
届ける子供＞

(6) 第6学年 総合「バトンをつなげ！輝く学校、羽ばたく自分！」 継続・発展

6年生は、年間を通じて「自分づくり」をテーマに、学校行事をはじめとする教育活動に取り組んでいる。今年度は、そのリーダーとしての歩みを基に、企画から構想・準備に至るまで、自分たちの力で創作劇をつくりあげ、学習発表会で披露した。最高学年前半での自分たちの成長を客観的に捉え、手応えを実感できるよい機会となった。何よりも創造力や表現力に磨きがかかり、それが一人一人の自信に繋がっていったことが大きな成果であった。

2学期後半からは、家族へインタビューしたり、地域からゲストティーチャーを招いて「生き方」についての話を聞いたりしている。ゲストティーチャーは、大学講師、本校学童保育の創設者、福祉施設経営者等と多岐に渡る人材を選び、様々な角度から「なりたい自分」について考え、今の自分を見つめる活動を行った。現在はさらに、「なりたい自分」に向けて具体的な目標を決め、日々の暮らしの中で、自分を高める活動に取り組んでいる。



＜布で校章を形どり、絆を表現する子供＞



＜ゲストティーチャーから福祉に関わるマークの説明を受ける子供＞

(7) 全学年 学校行事「中太小ちいきじゅく」 継続・発展

本校の伝統行事の一つに児童と保護者が地域の方から学ぶ「中太小ちいきじゅく」がある。今回は、SDGsの目標14「海の豊かさを守ろう」と関連させて実施することとし、4月から学校応援ボランティアとして活躍してくださっている方を講師に招いた。本校区のような丘陵地に住みながらも、定期的に実家のある石川県珠洲市に通い、アワビやサザエ等の素潜り漁師をされている方である。素潜り漁の方法や苦労、アワビの天敵やオス・メスの見分け方等について語っていただいた。アワビの天敵であるタコは、冬になると居なくなるはずであるが、近年は磯に残り続けるため、アワビの数が減少しているなど、アワビ漁から感じる地球温暖化についても触れていただいた。

最後に、世界各地でマイクロプラスチックが問題化しており、ウミガメのお腹の中からマスクが発見されたという新聞記事とともに、射水

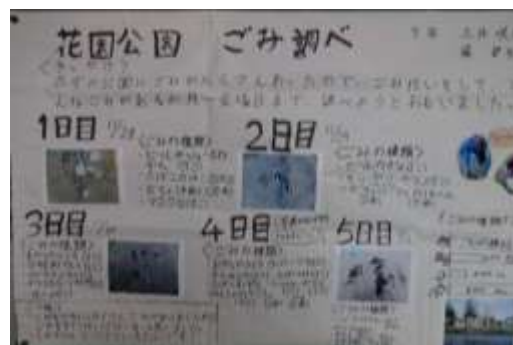


＜素潜り漁についての話を聞く子供＞



＜「SDGs ゴミ拾い」を楽しむ1年生＞

市の六渡寺海岸の様子や清掃活動等についても紹介された。六渡寺海岸のゴミの殆どが、県内の河川から流れ込んできていることが判明した記事にも触れたことで、自ら動き出す子供が出てきた。1年生がお楽しみ会で「SDGs ゴミ拾い」をしたり、2年生で SDGs 係ができたり、5年生が公園のゴミ拾いを1週間実施して新聞にまとめたなど、一人一人が自分の問題として捉え、自分の頭で何ができるかを考えて、それを行動に移す姿がみられるようになった。



< 5年生が作成した新聞 >

3 成果と課題

- SDGs の観点から既存の活動を捉え直したことで、「守り育てる」「住み続けられる」「豊かさを守る」等の視点を新たに加えた活動を展開することができた。
- 地域の人や魅力に触れ合う活動、地域の環境を生かし働きかける活動、地域に学び貢献する活動等を通して、地域への思いを強め、より深く自分を見つめる機会とすることができた。
- ・ ふるさと学習において見られた「ひと」「もの」「こと」に関わろうとする主体性をさらに他教科・領域においても増やしていきたい。そのために、まずは自ら課題を見付ける力を高めることが必要だと考える。

4 おわりに

私たちは、地域の環境に生かされ、地域の人々によって支えられて生きている。しかし、学校の中だけの生活では、そのことに気付きにくい。今年度、子供たちは、地域に出かけ様々な人々と触れ合うことで人の温かさを知り、生き物を育てることで環境を守る難しさを知り、地域に貢献する人々に出会うことで自分にできることを考え始め、全校テーマである「なりたい自分」への意識を高めていった。

また、児童委員会の5・6年生が中心となってSDGs週間を企画し、給食の時間を利用してSDGsの動画を観たり、SDGsカルタを募集したりするなど、全校で取り組んだことで、「自分にできることをしよう」という機運が高まってきている。

これからも、SDGsのような地球規模のグローバルな視点を持ちつつ、自分の足元を見つめ、具体的に何ができるかを考え地道に実行に移していくような、ローカルに働きかける子供を目指し、ふるさと学習を推進していきたい。



< 図書室のSDGsコーナーと全校児童から募集したSDGsカルタ >